

広報芝浦

AUTUMN 2025.11

SHIBAURA
INSTITUTE OF TECHNOLOGY



特集

キャンパスで世界とつながる

—「多文化共修」で加速する学内の国際交流

広報芝浦 2025.11.30 Vol.57

学校法人芝浦工業大学 入試・広報部 企画広報課
〒135-8548 東京都江東区豊洲 3-7-5 TEL : 03-5859-7070 E-mail : koho@ow.shibaura-it.ac.jp



芝浦工業大学

SHIBAURA INSTITUTE OF TECHNOLOGY
Established 1927
Tokyo

Shibaura Institute of Technology

100th Anniversary

100周年記念事業
ご寄付のお願い



X
芝浦工業大学
公式アカウント



Instagram
芝浦工業大学
公式アカウント



YouTube
芝浦工業大学
公式アカウント



TikTok
芝浦工業大学
公式アカウント

広報芝浦

AUTUMN 2025.11

INDEX



(表紙)
建築家 藤本壮介氏講演会

芝浦工業大学第4回建築家展の目玉企画として、建築家 藤本壮介氏と太宰府天満宮西高辻信宏宮司をお招きして講演会を開催しました。500人を越える学生で豊洲キャンパスの大講義室が満席になる盛況ぶりでした。



芝浦工業大学
第4回 建築家展
(9/26～10/26)

大阪・関西万博の会場デザインプロデューサーとして知られる藤本壮介氏が設計した「太宰府天満宮仮殿」を中心とした展覧会を開催しました。会場では菅原道真公と本学創立者有元史郎についての展示も行いました。



04 [特集1]
キャンパスで世界とつながる
—「多文化共修」で加速する学内の国際交流

08 [特集2]
来場者過去最多！
オープンキャンパスレポート

12 創立100周年記念10回連載
第3回 戦中・戦後の苦しい最中でも
仲間や恩師と支え合った学生生活
内田 晃一さん

14 SIT Academic Column
故人を偲び、吊う行為のコンテクストを読み
デジタルメディアを活用しながら「新たな吊い方」を
デザインする
デザイン工学部／コンテクスチュアルデザイン研究室
瓜生 大輔 准教授

18 しばうら人 卒業生の「今」
幅広い学びと経験を生かして
時代の要請に応えるエンジニアに！
トヨタ自動車株式会社 津田 峻太さん
工学部機械工学科 2017年3月卒業
理工学研究科機械工学専攻 2019年3月修了

20 ACTIVE STUDENTS! 活躍する芝浦工大の学生たち
大学院理工学研究科修士課程 建築学専攻1年
末松 拓海さん
ヨット部
工学部 機械機能工学科4年 尾茂田 昌士さん
建築学部 建築学科4年 濱口 寛太さん

22 SITニュース

2025
AUTUMN



キャンパスで世界とつながる ―「多文化共修」で加速する学内の国際交流



10年間にわたるスーパーグローバル大学創成支援事業(SGU事業)を経て、本学のグローバル教育は“海外へ留学する”にとどまらず、“大学にしながら世界とつながる”という新たなステージへと進化しています。その鍵となるのが「多文化共修」。多様な文化が共存するキャンパスで展開される新たな国際交流の取り組みについてご紹介します。

世界から集う留学生

グローバル化が加速する今日において、相手の文化や立場を理解し、力を合わせて未来を築いていくことは欠かせません。「世界に学び、世界に貢献するグローバル理工系人材の育成」を教育理念に掲げる本学では、日本人学生と留学生がそれぞれの文化的多様性を生かしながら共に学修する「多文化共修」を積極的に推進しています。その舞台となるキャンパスには、世界各国から多くの留学生が集っています。2012年度に147人だった受け入れ留学生数は、SGU事業の採択を契機とした留学プログラムなどの拡充により、2023年度にはおよそ13倍の1908人に達しました。アジアのみならず、ヨーロッパや南米など幅広い地域から留学生を受け入れており、学生が日常の学びの中で国際性を育める環境を整えています。

TOPIC SIT ASEAN サテライトオフィス（バンコク）開所式を開催



8月22日、SIT ASEAN サテライトオフィス（バンコク）で、開所式を開催しました。駐タイ王国日本特命全権大使をはじめ、日タイ双方の大学関係者や現地メディア関係者など約70人が出席し、式典の最後にはテープカットが執り行われました。今後は本拠点を軸に、ASEAN地域の大学や高校との交流を一層深め正規留学生の受け入れおよび国際共同研究の推進を中心としたグローバル事業拡大に努めていきます。

日常の中で、日本人学生と留学生が共に学び合える機会を提供しています。



世界と協働する学び グローバルPBL

本学では、アクティブラーニング教育の一環として従来から展開してきたPBL（Project Based Learning）を発展させ、国内外の協定校や企業、行政機関と連携して実施する「グローバルPBL」を積極的に展開しています。

グローバルPBLでは、海外協定校の学生と混成チームを組み、さまざまな課題の解決に取り組めます。海外の協定校で実施する「派遣型」に加え、本学にしながら参加できる「受入型」が用意されています。「海外留学はハードルが高い」と感じる学生でも、キャンパスにしながら実践的な国際交流を経験できる点が大きな魅力です。

なお、プログラムの難易度は幅広く用意されており、1年生から参加可能なものも多いです。多様なバックグラウンドを持つ仲間と英語で議論しながらプロジェクトを進めることで、実践的な課題解決力や国際的なコミュニケーション力を磨くことができます。

受入PBLレポート インドネシア・バンドン工科大学×芝浦工業大学

インドネシアから三浦半島へ

国際協働による

新たな観光ビジネスモデルの提案

9月10日から19日までの10日間、本学でインドネシア・バンドン工科大学とのグローバルPBLが開催されました。本プログラムには、バンドン工科大学から25人、本学から37人の学生が参加。受け入れはシステム理工学部環境システム学科・市川学教授のもとで行われました。学生たちは国籍を越えた混成チームを組み、システム工学・データサイエンス・デザイン思考を融合させ、社会課題の解決とビジネスモデルの創出に挑みました。

テーマは「Attract Indonesian people to travel the Miura Peninsula（インドネシアから三浦半島へ観光客を誘致する）」。

新型コロナウイルスの影響で観光客数が回復せず、外国人観光客の姿があまり見られない三浦半島に焦点を当て、インドネシアからの旅行者を呼び込むためのビジネスモデルを検



討しました。期間中、学生たちは英語でのコミュニケーションを通じて、ニーズ分析や2泊3日の現地調査、アイデア設計、プレゼン資料作成に取り組みました。最終発表会では、京浜急行電鉄株式会社のご担当者や審査員に迎え、英語での発表と質疑応答に挑戦。「どのようなPRするか」「三浦でしかできない理由は何か」など社会の第一線の視点から鋭い質問が投げかけられました。ビジネスモデルの提案を行う本プログラムの通して、学生たちはシステム工学の理解を深めるとともに、アントレプレナーシップや異なる文化的背景を持つ仲間と協働する力を高めました。

学内にいながら、世界とつながる学び。

国際交流を楽しみ、成長を実感する学生に話を聞きました。



河野 風沙さん
システム理工学部数理科学科4年

〈主に参加した国際プログラム〉
2022.11 受入PBL（インドネシア・スラバヤ工科大学）
2023.2-3 語学研修（アイルランド・ダブリンシティ大学）
2023.8 派遣PBL（インドネシア・スラバヤ工科大学）
2025.4～現在 GEA（Global Engagement Ambassador）として活動

Q 芝浦工業大学の国際的な雰囲気について、学生生活の中で感じることはありますか？

A キャンパスには世界各国からの留学生がいて、GLC（Global Learning Commons）などの交流スペースでは自然に国際的な雰囲気を感じられます。イベントも予約不要で気軽に参加できるものが多く、日常の中で異文化に触れられる環境が整っていると感じます。

Q 国際交流を通して、印象に残っていることは？

A 受入PBLで交流したインドネシアの学生と、翌年の派遣PBLで現地に行った際に再会できたことがとても印象に残っています。彼女たちとは、今でもチャットで連絡を取り合う仲です。また、GEAとして企画したウェルカムイベントでも、共通のゲームの話題で留学生と盛り上がり、SNSを交換してその後一緒に食事に行くなど、交流が自然と広がりました。

Q たくさんさんの国際プログラムに参加されていることは？

A もともと英語が好きで、高校時代にアメリカに短期留学した経験もあり、国際交流にはとても関心がありました。大学入学後、留学に興味はあったものの、語学力に不安があり、まずは国内で開催される受入PBLを選びました。そこで楽しさを感じ、また奨学金などのサポートもあったので、語学研修や派遣PBLにも参加しました。今は、これらの経験を生かして、GEAとしての活動にも取り組んでいます。

Q 国際交流に少しでも興味がある学生へ、メッセージをお願いします

A 芝浦工業大学には、海外に行かなくても参加できる国際交流のイベントやプログラムがたくさんあります。留学に不安がある人も、まずはこうした選択肢があることを知り、活用してもらえればと思います！

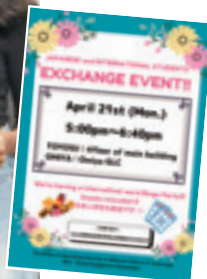


キャンパスに広がる交流の輪 国際交流イベント

キャンパス内は、留学生との交流機会であふれています。その代表的な取り組みが、国際部が開催する国際交流イベントです。日本人学生が早い段階から異文化に触れ、国際的な関心を育むきっかけになっています。

EXCHANGE EVENT

日本人学生と留学生が協力してマスを埋めるBINGOゲームを実施。日本人参加者の約8割が1年生で、言語や文化の壁を超えて盛り上がりしました。



Global Festa

留学経験者・短期留学生による各国の大学紹介、国際部による留学プログラム・奨学金相談、キャリアサポート課による留学×就職相談など多彩なブースを設置し、留学を希望する学生や海外に興味のある学生に新たな発見の機会を提供。このイベントも日本人参加者の約半数が1年生でした。



学生が担う国際交流の最前線

GSS・GEA

こうした国際交流イベントの企画・運営には、学生の力が欠かせません。本学では、国際部の活動を支える学内アルバイト制度としてGSS（Global Student Staff）とGEA（Global Engagement Ambassador）の2つを設けています。国際交流に参加する一つの形でもあり、語学力やコミュニケーション力を向上させる実践的な経験を積むことができます。

GSS

（Global Student Staff）
国際交流の現場を支える学生アルバイト

- 単発型のアルバイトとして活動
- 月に数回、業務案内が配信され、スケジュールに合わせて柔軟に参加可能
- 主な業務
 - 留学生向け「浴衣着付け体験」のサポート
 - キャンパス内や周辺地域のツアーガイド
 - 空港への送迎対応
 - イベント運営のサポート など



GEA

（Global Engagement Ambassador）
キャンパスの国際化を推進する学生インターン

- 国際部のインターン生として活動
- 主な業務
 - 日本人学生・留学生向けイベントの企画・運営
 - 広報用のポスター制作



Q 海外留学の経験もある河野さんから見ると、学内での「多文化共修」の良さはどんなところにありますか？

A 日本という慣れた環境の中で活動できるので、言語や文化の違いに対する不安が少なく、安心して参加できることが魅力です。最初は自分から話しかけるのが苦手だったのですが、積極的に交流している他の学生の姿に刺激を受け、「自分も話しかけてみよう」と思うようになりました。そうした経験を通して、少しずつ積極性が身についたと思います。今も英語力に不安はあるものの、初対面の方と英語で雑談ができるレベルにはなりました。

来場者過去最多！ オープンキャンパスレポート

今年度は予約定員の上限を撤廃し、過去最多の来場者数となったオープンキャンパス。
その盛り上がりを報告します！



豊洲オープンキャンパス レポート

8月23日・24日、豊洲キャンパスでオープンキャンパスが開催され、大宮キャンパスに引き続き過去最高となる12739人の方々にご来場いただきました。

豊洲キャンパスでは、上級生が所属する研究室を擁する工学部・デザイン工学部・建築学部（全学年在籍）を中心に、2026年度から新しい教育課程となるシステム理工学部も加えたすべての学部の紹介を行いました。

各学科・課程ブースでは、学生や教員が日頃の研究や作品を紹介。自作の装置を操作しながら解説したり、研究室に足を踏み入れた高校生に実際の実験機器を披露したりと、来場者に「最先端の学び」を体感していただきました。また、教育課程の紹介のほか、ポップな雰囲気のあるアンケートを掲示するなど高校生が気になる学生生活の雰囲気を知ることができる工夫が随所に見られました。

大宮オープンキャンパス レポート

8月2日・3日、大宮キャンパスでオープンキャンパスが開催され、2日間で過去最高となる7105人の方々にご来場いただきました。

開催前には台風の直撃を心配する声もありましたが、両日共に晴天に恵まれ、無事に開催することができました。

4年間をこのキャンパスで学ぶシステム理工学部の展示が中心となった今回。課程ごとの色のオリジナルTシャツを着用した学生や教員が、2026年度からの「学科制」から「課程制」に改組するシステム理工学部の各課程・コースについて、未来の後輩たちのために熱心に説明を行いました。また来場者は、普段は見ることのできない研究室の様子に目をやり、

午前・午後の2部制で行われた各回共、大学公式マスコットであるテクシバくんが登場し、会場を盛り上げました。



大学生による制作物、研究活動の説明に真剣に耳を傾けていました。

学生スタッフの案内で、緑豊かで広大なキャンパスを巡るキャンパスツアーは、日傘を差す強い日差しの中ながら、現役学生から「ありのままのキャンパスライフ」について話を聞いて各施設を見学できる機会として、両日共に大変好評をいただきました！

2日目には特別企画として、YouTubeのヨビノリたくみさんとシステム理工学部教員による座談会が行われました。座談会の様子は、ヨビノリたくみさんのYouTubeチャンネル（予備校のノリで学ぶ「大学数学・物理」）で公開中です。ぜひご覧ください。



来場者の学年内訳（高校生以上）

	2024年	2025年	増加人数（率）
高校3年生	2,238	3,261	+1,023 (+45.7%)
高校2年生	2,297	4,487	+2,190 (+95.3%)
高校1年生	895	1,971	+1,076 (+120.2%)
既卒生	65	126	+61 (+93.8%)
同伴者	6,545	9,087	+2,542 (+38.8%)

■オープンキャンパス来場者数の昨年度比
来場者数詳細

	大宮			豊洲			総計
	2(土)	3(日)	小計	23(土)	24(日)	小計	
2025年	3,585	3,520	7,105	6,800	5,939	12,739	19,844
2024年	3,024	2,998	6,022	3,410	3,120	6,530	12,552
増加人数（率）			+1,083 (+18.0%)			+6,209 (+195.0%)	+7,292 (+58.0%)

変革の中で見えた確かな手応え
S-I-Tの魅力があふれた一日

2025年のオープンキャンパスには、システム理工学部の大きな改組を控え、その魅力を実際の教育現場で受験生に直接伝えたい思いで臨みました。来場者の皆さんは、S-I-Tの教育研究活動やキャンパスライフについて、目をキラキラさせて質問してくださいました。多くの受験生と対面で触れ合えたことが何よりも大きな財産です。印象的だったのは、入試課学生スタッフを中心に、各学部の学生が頼もしかったこと!! 猛暑の中でもハッラツとした声がけ、無駄のない動き、ホスピタリティある振る舞い、何をとても素晴らしかったです。来場した受験生にとって「憧れの学生像」に映ったはずです。芝浦生の未来は明るい!! 数か月の準備によって、キャンパスの隅々に「S-I-Tの魅力」をしみ渡らせてくださった、全学生・教職員の皆様に厚く御礼を申し上げます。



システム理工学部長
澤田 英行



オープンキャンパスを支えた 入試課学生スタッフの活躍

オープンキャンパス成功には学生スタッフの活躍が不可欠でした。
運営を支えた彼らに、大盛況となった今年のオープンキャンパスを
振り返ってもらいました。



2025年度入試課学生スタッフ幹部
建築学部建築学科3年
坂元 拓登さん

今回のオープンキャンパスでは、学生スタッフの幹部長として全体の状況を見ながら、各セクションで問題が起きた時にすぐに駆けつけて対応する役割を担いました。特に今回は来場者数が過去最多で、現場がパンクしそうな場面もありましたが、他セクションから応援を回したり、翌日以降のシフトを見直したりして、運営の安定化に努めました。

幹部長として一番意識していたのは「メリハリをつけること」です。学生スタッフは明るく元気に活動してくれる一方で、時に気が緩んでしまう場面もありました。その活発さを無駄にせず、メリハリをつけられるよう声かけや雰囲気づくりを工夫しました。

職員の方とは、事前・事後のミーティングを通して連携を深めました。学生目線を感じたことや必要だと思った備品・運営方法を共有し、職員側の視点とすり

合わせながら改善を進めました。トラブル対応では、学生スタッフの幹部同士で状況を確認し合いながら判断を下し、職員の方にも報告しつつ、全員で乗り越えることができました。

この経験を通して、リーダーシップの大切さを強く感じました。自分の動き方一つで、全体の雰囲気や流れが変わることを実感しましたし、スタッフ一人ひとりと積極的に関わること、チーム全体を前に進めることができました。最後に「やりきった」と感じられた瞬間は、本当にやりがいを感じました。

次年度以降に幹部を担う後輩には、スタッフとの関係づくりを大切にしてほしいです。小さな声に耳を傾けたり、気軽に話しかけたりすることが、チームワークにもつながります。そして、一人で抱え込まず、仲間と協力しながら進んでほしいです。



建築学部建築学科2年
諏訪部 春希さん

初めて先輩という立場で活動した今回のオープンキャンパスでは、先輩への指示や状況整理を行いながら、先輩方を支える立場を担いました。業務では状況を把握し先を見据えて行動することを意識したことで、指示を出す側の視点について学ぶことができました。

保護者や高校生からの質問に答える中で、芝浦工業大学の魅力を自分の言葉で伝えられた瞬間、この活動にやりがいを感じました。女子生徒と保護者の方から建築学部について尋ねられた際、「女子学生が思ったより多い」と安心された様子が記憶に残っています。大学の取り組みが来場者に伝わり、進路選択の一助になったことがうれしく、誇らしい気持ちになりました。

想定外のハプニングで先輩や職員の方の指示を待つ状態になった際、他学部のスタッフとほとんど言葉を交わさずに状況を共有できたことも印象的でした。普段の授業では接点の少ない仲間とも、自然に連携できる関係を築けたことは自分にとって財産になりました。入試課学生



スタッフとしての積み重ねが、仲間同士の信頼関係やチームワークを育てているのだと感じました。

今回の経験を通じて、柔軟に判断しながら周囲と協力することの大切さを実感しました。自分が前に出るだけでなく、状況を整理して共有することで、先輩や後輩、職員の方と動きやすくなり、全体の流れも自然に整っていきました。また、来場者と向き合う中で大学の魅力を改めて意識でき、自分自身の学びにもつながりました。入試課学生スタッフの活動は、運営を支えるだけでなく、人との関わりを通して成長できる貴重な機会であると感じています。



戦中・戦後の苦しい最中でも 仲間や恩師と支え合った学生生活

「創立100周年記念連載」として今回お話を聞いたのは、

芝浦工業大学と同じ1927年に生まれた卒業生のお一人である内田晃一さん。
学生時代の雰囲気や学校生活、また戦争の最中でも教員と学生が支え合っ
て学んでいた当時の様子が伝わってくる貴重なインタビューとなりました。



内田 晃一 さん

1927年栃木県出身。東京高等工学校附属工科学校から東京高等工学校へと進
学し、建築学を専攻。卒業後は建築会社や新聞社を経て、20代半ばからプロ
のジャズ・ミュージシャンの道へ。さまざまな有名ジャズバンドに参加した後、
独立してスタジオミュージシャンとして活躍し、ヴィブラフォン奏者として
名声を獲得。2016年にはその功績から文化庁長官表彰を受賞。

戦争の最中で過ごした 芝浦工大での学校生活

栃木県鹿沼市で生まれ、小
学校2年の時に東京都世田
谷区に家族で移り住みまし
た。東京高等工学校附属工
科学校（後の芝浦高等工学校
附属工科学校・1946年
廃止）に進学したのは、家業
が建築会社を営んでいたこと
もあり、建築を専門的に学ぶ
ことが目的でした。

ただし当時の東京高等工学
校（1943年から芝浦高等工
科学校）は、上級学校への進
学資格が得られない実業学校
です。入学当日にいきなり先
生から「入学はめでたいけれ
ど、上級学校を目指せない君
たちの進路は高等工学校まで
だ」と告げられたことを覚え
ています。これは失敗だった
かもしれない、というのが正
直な思いでした。転校も考
えたのですが、親に説得され
附属工科学校で3年、高等予
科で1年、東京高等工学校の
建築学科で3年と、計7年間
通うことになりました。

上級学校
に行けるわ
けでもないし
と、どこか不
貞腐れた気
持ちで、附属
工科学校の
頃は勉強熱
心な生徒で
はありません
でした。そ
れでも学校
が英語教育
に注力していたことを記憶していま
す。その後、さまざまな仕事に就く
中で、ここで得られた英語力にはと
ても助けられました。

実業学校が旧制中等学校と同じ制
度で統一され、私たちにも上級学校
の入学資格が与えられるという
ニュースを先生が大慌てで伝えてき
た時のことはよく覚えています。
1943年の中等学校令に関連する
実業学校規程の交付に伴うもので、
これは生徒だけでなく先生も一緒に
なって大喜びしていました。当時の
実業学校は、「インチキ学校」だと揶
揄され、内心では悔しい思いをして
いたことも。そんな気持ちが晴れた
時は、本当にうれしかったですね。
その一方で、附属工科学校に入學



戦時下での軍事教練の様子

三浦元秀先生の存在が 私たちの心の支えだった

当時は主に旧アメリカンスクールの
木造校舎を使っていました。創立
者の有元史郎先生はすでに亡くなっ
ていましたが、学校の至るところに
写真が飾られていたので、名前はも
しろよく知っていました。戦時中
には初代理事長の岸本綾夫先生が毎
週1回、学生の前で話をしていたこ
ともよく覚えています。

先生方の思い出を振り返ると、私
がとてもお世話になったのは、三浦
元秀先生（後の理事長）でした。教
師というより技術者に近い人柄で、
手を上げるどころか、怒られたこと
もない。優しくて多くの学生から慕
われていました。

戦争が終わって私たちがまず頼っ
たのも三浦先生です。「これからどう
したらいいですか？」と電話したと
ころ、「戦争は終わったから何も心配
しなくていい。9月から出てこい。
授業するぞ！」と力強い言葉をもら
いました。そこで私たちは宇都宮か
ら東京に戻り、再びキャンパスで勉
強を再開するのです。

戦禍を乗り越えて状況は一変しま
したが、私が気持ちも新たに勉強熱

多くの人との出会いが 7年間で得られた財産に

心になった、という訳ではありません。
ん。建設会社で橋梁建設のアルバイ
トをする傍ら、友人とよく街で遊ん
でいました。そんな日々の中、私た
ちがよく訪れていたのも、三浦先生
の家です。三浦先生の奥様が恵比
寿あたりの料理屋で働いていて、よ
く友人と訪問して、ご飯をご馳走
になっていました。振り返ればと
ても迷惑をかけましたが、当時の
学生は先生の家に行こうなんて考
えもしません。いかに三浦先生が
学生から慕われていたかを示すよ
うな思い出です。

終戦後の芝浦校舎周辺は、東京湾
から乗下船する進駐軍の米軍兵士が
多く、私も自然と海外の音楽に馴染
みをもつように。その後、ジャズ・
ミュージシャンを目指すようになった
原体験の一つかもしれません。ま
た学友には後にワナー・パイオニ
ア（現ワナーミュージック・ジャ
パン）の社長を務める山本徳源氏が
いました。『徳さん』は当時から英語
が堪能で、よく校舎の窓から米軍兵
士に話かけていました。

振り返れば戦争における苦勞もあ
りましたが、多くの友人や三浦先生
をはじめとした恩師との出会いなど、
芝浦で過ごした7年間は人生におけ
る大切な時間になりました。学校と
同じ1927年生まれの卒業生の一
人として、これからは芝浦工業大学
の発展と数多くの後輩たちの活躍を
願っています。



軍事教練での射撃訓練の様子



故人を偲び、弔う行為の
コンテキストを読み
デジタルメディアを活用しながら
「新たな弔い方」をデザインする

コンテクスチュアルデザイン研究室は、実社会のコンテキスト(文脈)を理解し、最先端の技術を取り入れながら、今日あるいは近未来の社会生活に貢献するデザインに取り組んでいる。同研究室を主宰する瓜生大輔准教授の研究テーマは「弔いのデザイン」。弔いは、私たちの生活において避けては通れないものだが、そこにはいかなるコンテキストが存在し、どのようなデザインが求められているのだろうか。

スマホの写真を見て故人を
偲ぶことはできるが……

弔いとは、ある人が亡くなった時、遺族や友人、知人などが故人を偲ぶ、あるいは伝統的な儀礼に則って供養することを指すのが一般的だ。弔いは私たちの生活の中にあり、新しい技術や手法の発達、普及により私たちの生活に変化が生じるならば、弔いのあり方や潜在的なニーズも変わってくる。瓜生准教授は、この弔いをデジタルメディアなどを用いてデザインする研究に、2000年代半ばから取り組んでいる。

「例えば、故人を偲ぶ際に重要な役割を果たす写真は、現在そのほとんどがデジタル化され、故人の生きた足跡がデータとして我々のスマートフォンやパソコンに残されています。にもかかわらず、それらは弔いのコンテキストにおいてほとんど有効に活用されていません。従来の墓や仏壇などのデザインは、デジタルメディアを介して弔うことを想定していないからです。カメラロールをスクロールすることで故人の思い出を振り返ることはできますが、その行為に、伝統儀礼に負けなぐらいの気持ちを込められないか。その点に着目し、新たな弔いの形を提案すべく、2013年に『Fenestra』をデザインしました」

「Fenestra」はラテン語で「窓」を意味する。普段は調度品(鏡、写真立て、ロウソク立て)として日常生活に溶け込んでいるが、鏡をじっと見つめるかロウソクに火を灯すと、故人の面影が蘇るというものだ。こうしたプロダクトをデザインする上で、瓜生准教授が重視しているのが適切

SIT Academic Column

デザイン工学部／
コンテクスチュアルデザイン研究室
瓜生 大輔 准教授



PROFILE

1983年生まれ。博士(メディアデザイン学)。慶應義塾大学大学院メディアデザイン研究科(KMD)博士課程修了。シンガポール国立大学、慶應義塾大学、東洋大学、東京大学を経て、2023年に芝浦工業大学デザイン工学部に着任。ヒューマン・コンピュータ・インタラクション(HCI)デザイン研究を主軸に、宗教学、文化人類学などの視座を取り入れながら死者祭祀・弔いのためのデザイン研究に取り組む。国際会議ACM CHIフルペーパーで3度のHonorable Mention受賞など、HCIデザイン研究領域でさまざまな業績を有する。



研究協力者宅に設置された「Fenestra」



なインタラクティブなデザインという。

「私はインタラクティブデザインという分野を専門の一つにしています。インタラクティブとは、例えばスマホのソフトウェアキーボードに文字を打ち込んだり、SNSで『いいね』を押したりすると、それらが表示されるといった入力・出力の組み合わせのことです。こうしたインタラクティブをデザインするにあたって重きを置くべきは、デバイスの見た目や形のみならず、それを扱う人の振る舞いや行動、動作です。吊いにおいてもっとも大事なのは、集中できることだと私は考えています。しかし、スマホで故人の写真を見ることは誰でもできますが、そのスマホをはじめとする現代の情報機器は汎用的、多用途的で、SNSなどからの通知もひっきりなしに飛んでくる。そこで、集中を促すインタラクティブの一案として『Fenestra』では鏡を見つめるか、ロウソクに火を灯すことを起動条件にしました」

一般的な研究発表の場では 出会えない人たちの接点を得る

瓜生准教授は、トモエ陶業株式会社という、愛知県瀬戸市で主に骨董を製造販売するメーカーと10年近く共同研究を行っており、その進捗および成果を発表する目的でエンディング産業展（葬儀、埋葬、供養、相続など、終活産業に関するあらゆる設備、機器、サービスが一堂に会する日本最大の専門展示会）

答えのない問いに切り込んで いく過程を楽しんでいる

デザイン研究では、研究者は、社会におけるデザイン活動を客観的に分析するのが一般的だ。それに対して瓜生准教授は、自身の手で新たな「吊いのデザイン」を作り出し、それ自体を研究成果の一つとして考えている。非常にユニークな研究スタイルだが、それゆえに課題もある。

『「吊いのデザイン」を謳っているわりに、これまでに自分がデザインを手掛けた事例が少ないことに恥ずかしさを感じています。研究室としても『これをデザインしました』と堂々と言える成果が必要でしょう。私の研究は、少し先の未来を想定したモノやコトをデザインし、実際に作って『皆さん、どうですか？』と世の中に発信することを中心に据えています。発信すれば当然、賛同だけでなく批判も受けます。しかし、それを通してでしか生み出せない研究成果がある。現時点では、墓や納骨堂、あるいは埋葬に関わるデザインをいち早く手掛けたいと考えています」

SIT Academic Column

に出版している。

「エンディング産業展への出展はトモエ陶業からの支援があった実現したのですが、私はこれを、論文を書いて学会で発表するといった一般的な方法では出会えない人たちの接点を得るための、貴重な機会と捉えています。私の研究室で扱うテーマは大学や研究室にこもっていても前に進まず、日頃から学生にも『研究室の外と接点を持つように』と言っています。そうすることで、各々が設定したテーマの社会的コンテクストをより深く理解し、かつそのコンテクストの中でデザイン研究に取り組むことができるからです」

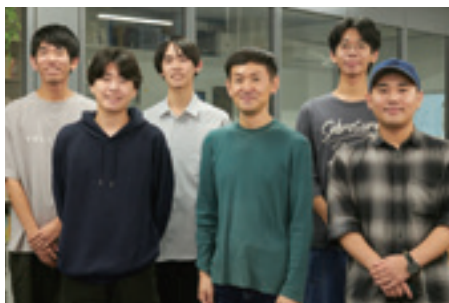
エンディング産業展では、自分がブースに立っているだけで、吊いのコンテクストに興味を持つ大勢の人たちが集まってきてくれる。瓜生准教授にとっては願ってもないシチュエーションだろう。

「今年も、遺影を前撮りする活動をなさっているフォトグラフアーの方と何かコラボできないか相談したり、『終活ビジネスの展示はたくさんあるけれど、こうした文化的でアカデミックな活動をされている出展者はあまりいないので、興味深く拝見しました』と声をかけてくださった僧侶の方と意見交換をしたりと、非常に有意義な時間を過ごすことができました」



瓜生准教授が約20年にわたり「吊いのデザイン」を主軸に研究を進めている一方で、自身の主宰するコンテクスチュアルデザイン研究室の学生たちの研究テーマはバラバラだ。それは研究の多様性を重視しているためだが、教える側にとっては非効率でもある。

「二人ひとりの学生が、自らの関心領域からテーマを選択、あるいは社会的な 이슈 を発見し、それぞれのコンテクストを深掘りし、そのコンテクストに携わる人々から評価されるようなデザインを生み出してほしい。と、口で言うのは簡単ですが、本当に各人が各々のスタイルで、しかも簡単に答えが出ない研究に取り組んでいるので、私自身が毎回指導力を試されているような研究室です。同様に、私が研究している『吊いのデザイン』も、いまだ答えが見えません。では、なぜそれを続けているかといえば、そこに価値を見出しているからであり、おそらく私は答えのない問いに切り込んでいく過程を楽しんでいるのだと思います。学生たちにもその楽しさを体験してほしいし、もちろんなんらかの成果につながれば、それを社会に発信するための協力は惜しみません。あるいは答えが見えなくても、ライフワークとして研究し続けられるようなテーマに出会ってくれたらとてもうれしいです」



卒業生の今



しばうら人

創立以来10万人を超える
芝浦工業大学の卒業生。
現在も日本はもとより
世界各地で活躍しています。
エンジニアはもちろん、
さまざまな方面で活躍する
卒業生を紹介します。

PROFILE

津田 峻太さん

Ryota Tsuda

トヨタ自動車株式会社 勤務
工学部機械工学科 2017年3月卒業
理工学研究科機械工学専攻
2019年3月修了



津田峻太さんは機械工学科に在学中、学業優秀者に贈られる日本機械学会畠山賞を受賞。大学院修了後はトヨタ自動車に入社し、一貫してトランスミッションの開発に携わっている。今、エンジニアに求められるスキルとは何か。なぜ分野横断の学びが必要なのか。企業で開発の最前線に立つ津田さんが明確に指摘する。

幅広い学びと経験を生かして 時代の要請に応えるエンジニアに！

エンジニアの土台をつくる 大学での学び

高校時代からものづくりに対する漠然とした憧れがあり、「将来は社会で活躍できる人材になりたい」「世の中に貢献できる仕事になりたい」「自分のつくったものが目に見えるものづくりがしたい」と考えていました。そこで機械工学科で大学を探し、就職に強い芝浦工業大学を選びました。入学後は、自分の目標を達成するための土台づくりと考え学業を頑張りました。私自身が社会に出てから実感したのですが、講義で学ぶ4力学（熱力学、流体力学、材料力学、機械力学）の基礎的な知識はエンジニアとして仕事をしていく上で必須です。細かな数式をすべて覚える必要はありませんが、エンジニア同士で会話する際、「物理的にこうなるよね」という共通の感覚があると意思合わせがスムーズだからです。

また、私は製図が好きでCADでの3Dモデルや図面づくりがとても楽しく、時には悩みながらも力を入れて取り組んでいました。製造業界で働くならCADを使えることは強み

トヨタ自動車に入社しました。

先行開発職を希望し、入社後研修を経て配属されたのが、HEVやBEVなどの電動車の先行開発を行う研究所。そこで自動車の動力装置であるトランスミッション全体の設計に携わりました。企画・設計・解析・評価の一連の流れを短いサイクルで回せる業務で、大学時代の一貫通貫の学びがそのまま生かせる内容でした。その後、米国にある海外事業体で量産設計・開発に1年間従事。現在は本社で生産・製造技術、特に歯車の新規開発に取り組んでいます。入社して7年目ですが、一貫してトランスミッションの開発に関わり、その中でも先行設計・量産設計・生産技術と領域を横断して業務を経験してきました。

芝浦工業大学工学部でも2024年度より分野横断して学ぶ課程制を導入したと聞きましたが、これには大きな意味があると思います。近年、人不足のため効率化の推進がますます重要な時代になり、一人の人間に求められるスキルが多様化しています。しかも短時間でのアウトプットが必要で、「経験がないからできない」ではなく、

になります。他大学よりも早い時期にソフトウェアを導入し、指導が手厚いことも芝浦工大のよさだと思っています。

さらに複数の教授の演習で、課題・実験・考察・レポート作成という一連のサイクルを何度も繰り返したことも役立っています。文献や論文を探し、教授や仲間とディスカッションしつつ理解を深める過程は、社会人として課題にアプローチする際に役立つスキル。芝浦工大ではこれを学生時代に身につけることができました。



大学の研究室イベント

日本機械学会畠山賞
W受賞

設計から評価まで 一貫通貫の取り組み

3年次からは佐伯暢人教授の粒状体力学研究室に所属し、震動を抑制するための粒の動きについて研究しました。実験装置を自分たちで設計すること、プログラミングも自分たちで行うことが研究室の特徴で、設計・実験・解析・評価に一貫通貫で取り組み、携われる範囲の広さが魅力でした。実際に装置を自分の手で組んで動かし、自身が追究する物理現象を見る化する過程には、とても手ごたえを感じました。

とはいえ、学業一色の学生時代だったわけではありません。体育会準硬式野球部に所属してキャプテン



リーグ優勝集合写真

今、求められるのは 分野横断できる人材

就職に際しては、社会的影響力の大きな人や役に立つシーンが見えるものづくりをしたいという気持ちから、自動車業界を選択。この先何十年も働いていく中で、スキルアップできる環境、大学のように仲間と切磋琢磨できる環境に魅力を感じ、

「別のアプローチで対応できる」人材でなくてはなりません。だからこそ分野横断する学びが必要です。

また、分野横断の学びは自らの選択肢を拡げてくれます。大学入学時は機械工学を選んだ理由が明確でなくても、いろいろな分野や人に関わるうちに心の琴線に触れる対象に出会えるもの。こうした機会は社会に出ると意外に多くありません。将来の目標の解像度を上げる意味でも、分野横断の学びは学生にとって価値があります。

私自身も生産技術を学び、さらには評価や制御への理解も深め、幅広くスキルを上げていきたい。極端な表現になりますが、トランスミッションを一人で開発できるエンジニアになるのが将来の目標です。



米国での生活(植林活動)

ACTIVE STUDENTS!

活躍する芝浦工大の学生たち

未来を形にする力

建築で世界をデザインする

大学院理工学研究科修士課程 建築学専攻1年

末松 拓海さん

数々の建築デザインコンペで
最優秀賞を獲得

大学院理工学研究科修士課程建築学専攻1年の末松拓海さんは、在学中に数々の建築デザインコンペで最優秀賞を受賞しました。2023年には「デザインチャンピオンシップ2023」で、さらに「第11回 POLUS 学生・建築デザインコンペティション」でも最優秀賞を獲得。卒業設計を対象とした全国合同卒業設計展「卒、25」では、全国から集まった作品の中で頂点に立ちました。

アイデアが生まれる瞬間

「設計のアイデアが浮かぶ時は、二つのパターンがあります」と末松さんは語ります。一つ目は、積極的に外に出ること。卒業設計では瀬戸内海の佐木島に移住し、地元の人々と交流しながら古い建物の解体ワークショップに参加。現場での体験や島の人との会話が新しい発想につながったといいます。最近では沖縄に1か月滞

在し、建築家や地域の人々と触れ合いながら、暮らしに根差した空間のあり方を考え続けました。

二つ目は、座学を大切にすること。末松さんは大学の図書館で、建築専門誌「新建築」を1954年からのバックナンバーを順に読み進め、過去から現在までの建築史を学んでいます。

仲間や後輩とのつながり

芝浦工大の建築学部は学年をこえた縦のつながりが強く、研究室で泊まり込みながら後輩と一緒に模型をつくったり議論を交わしたりする日々がありました。「同期や後輩に恵まれたことが、自分を大きく成長させてくれた」と振り返ります。

独自の建築観を深めて

末松さんは、「廃墟やスラム、迷路のような空間にも惹かれます。ただ美しさとして開発されていない場所を掘り下げたい」と語ります。沖縄滞在中には、ある建築家から「お前は『春はあけぼの』をつくれ」

と声をかけられました。清少納言が新しい美の概念を提示したように、「君も新しい美を発掘する存在になれる」という激励だったといいます。この体験が、末松さんの建築観をさらに深める契機となりました。

未来への展望

今後について尋ねると、「人々の暮らしに寄り添いながら、新しい可能性を提示できる建築をつくりたい」と力強く答えてくれました。芝浦工大での学びと仲間たちとの日々が、その夢を現実に近づけています。



卒業設計作品

建築で社会に
新しい景色を描く



シルバーフリート

第1レース1位



芝浦工業大学体育会ヨット部は2025年9月、「第54回全日本470級ヨット選手権大会」に出場。国内最高峰の舞台で、全国各地の予選を勝ち抜いたトップセーラーたちと戦った。

Q 全95艇が出場する中、54位という結果でした。上位48艇が進める決勝「ゴールドフリート」には進めませんでした。その後の「シルバーフリート」では1位になったレースもありました

シルバーフリート第1レースでの1位は本当に夢のような瞬間でした。自分たちが1年生の頃には想像もできなかった順位で、今回の結果を素直にうれしく思っています。もちろん、ゴールドフリートに進めなかったことは悔しかったです。ですが、それにとらわれずに、「先輩たちが背中を追いかけてくれるような走りをしよう」と意識しながらレースに臨みました。その結果を先輩たちが喜んでくれた時が一番うれしかったです。

Q オリンピアンやナショナルチームの選手も出場する大会です。大学としても12年ぶりとなった出場に向けて、課題や自信はありましたか？

ヨット競技は大学まで未経験ながら、関東大会の予選・本選では経験者に勝つことができ、大きく自信ができました。ただ強風が吹くと、経験者と大きくボートスピードの差がつき、その克服が課題だと感じました。ゴールドフリート出場は、大学から競技を始めた我々にとっては夢です。それを目標にして、海上に設置した風上マーク※と風下マークの間を何度も回航するマーク練習などに励みました。※目標とするポイント

Q 学業・研究と競技を両立させる、普段の練習の様子について教えてください

授業期間は土日、夏休みなどの長期休業中は週4日ほど練習しています。練習場所の江の島までの遠さが大変で、濱口は毎週、往復4時間かけて通っています。練習日が続く場合には、江の島の合宿所に宿泊します。移動時間は課題や予習・復習をしたり、合宿所での夜の自由時間

尾茂田・濱口ペアの選手権での結果

予選	第1レース	BFD(フライングにより失格)
	第2レース	26位
	第3レース	20位
	第4レース	31位
	第5レース	26位
	第6レース	34位
決勝 (シルバーフリート)	第7レース	1位
	第8レース	8位
	第9レース	9位
最終成績		54位(全95艇中)
フリート内順位		6位(シルバーフリート 出場47艇中)

最後に、応援してくれた人々、ヨット部の後輩にメッセージをお願いします
活動を支援してくださった学長や大学関係者、卒業生の皆様から感謝申し上げます。ご支援によって、素晴らしい環境で競技と練習に集中的に取り組めました。後輩にはぜひ、同じ目標へ全力で努力する仲間との時間が本当に楽しいことを、存分に味わってほしいです。

でレポートを進めたりしています。先輩が後輩に勉強を教えることもあります。こうして限られた時間を有効に使い、学業と競技の両立を心がけています。

芝浦工業大学

2025年度秋季 芝浦工業大学 学位記授与式・入学式が举行されました

9月25日、2025年度秋季学位記授与式（9月修了・卒業および入学式（10月入学）が举行されました。学位記授与式では博士課程8人、論文博士3人、修士課程22人、学士課程39人の学位記授与に加え、創立者有元史郎記念賞、学長賞（グローバル）の授与が行われました。続いて執り行われた入学式では、留学生を含む博士課程15人、修士課程31人、学部12人の入学者を歓迎しました。山田純学長は式辞において、先行き不透明なVUCA（変動、不確実、複雑、曖昧）の4つの英語



の頭文字）の時代を生き抜くには、国や歴史などによって生まれる人の考え方や価値観の違いに素早くかつ柔軟に対応する「異文化アジリティ」が重要だと説きました。留学経験で培った力を糧に、AIという新たな「異文化」にも柔軟に適応し、未来を切り拓いてほしいと語りました。また、鈴見健夫理事長は祝辞で、創立100周年を迎える本学の歩みに触れ、学生生活での努力と挑戦が将来を形づくることを強調しました。その上で、逆境に挑む力を磨くとともに、謙虚さと感謝の心を忘れずに学び続け、支えてくれた家族への思いを胸に、芝浦工業大学での学びを実りあるものにしてほしいとエールを贈りました。



第10回SBMCファイナルステージを開催

10月5日、第10回芝浦ビジネスモデルコンペティション（SBMC）が豊洲キャンパスで開催され、応募総数48チームの中から、書類選考とセミファイナルを通過した10チームが出場しました。

ファイナルステージでは、各チームが6分間のプレゼンテーションと5分間の質疑応答を実施。試作品を用いた発表や、企業・自治体との連携を見据えた提案など、実践的なアイデアが数多く披露されました。審査員か

らは、事業性や独自性など多角的な観点から質問や意見が寄せられ、活発な議論が行われました。

最優秀賞には「A」との差別化に悩むクリエイターのための、作品の制作過程を販売できるアプリ」というビジネスモデルを提案した「Lapsell」が選出されました。「Lapsell」は、急速に進化するAI技術によって生じた社会課題に着目し、クリエイターの創造性と価値を守るという観点から、独自性あふれるアイデアを打ち出した点が高く評価されました。

SBMC実行委員会は、入賞者の今後の挑戦を後押しするため、多様なフォローアッププログラムを展開し、継続的にアントレプレナーシップ活動を支援していきます。

●S-I-Tアントレプレナー育成募金・芝浦工大では、S-I-Tアントレプレナー育成募金を実施しています。詳細は以下よりご確認ください。



受賞一覧

	チーム名	タイトル
最優秀賞	Lapsell	AIとの差別化に悩むクリエイターのための、作品の制作過程を販売できるアプリ
優秀賞	Bioneer	うちの菌を可視化＆最適化！『加菌』で除菌・抗菌の先へ～空気をコーディネート～心環～断たれた循環を結び直す、自律神経の環～
（株）アーネストワン賞	熊人	孤独死ゼロ社会へ：低コストIoT見守りシステム
（株）AIRI賞	R&	100%天然精油で、TPOに配慮し、若者の香り課題を解決するレイヤー型アロマ製品
（株）イトーギ賞	ケムリン	スモークアウエイ DBDプラズマアクチュエータと超音波霧化でエアカーテン
（株）エスアイテック賞	R&	100%天然精油で、TPOに配慮し、若者の香り課題を解決するレイヤー型アロマ製品
NECネットエスアイ（株）賞	熊人	孤独死ゼロ社会へ：低コストIoT見守りシステム
（株）日本能率協会コンサルティング賞	Bioneer	うちの菌を可視化＆最適化！『加菌』で除菌・抗菌の先へ～空気をコーディネート～
ユニークビジョン（株）賞	Knowledge Pulse	Knowledge Pulse ー人材教育を「負担」から「価値を生む体験」へ
NEDO賞	ケムリン	スモークアウエイ DBDプラズマアクチュエータと超音波霧化でエアカーテン
研究室奨励賞（学長賞）	Lapsell	AIとの差別化に悩むクリエイターのための、作品の制作過程を販売できるアプリ
奨励賞	古とのは	助動詞バトルがお好きなんですよ
	スマートカート	スマートカート～買い物に新たな選択肢とストレスフリーな買い物～
敢闘賞	ピリチャ（PiriChat）	ピリチャ（PiriChat）～「ピリオド＋チャット」期限付きのチャット～
	インプレッション部	ミルミル：視線を価値に変える！
	UNCHAIN	NEURON-AIによるワークフロー自動化～業務効率化に対する障壁から解放する～
	歯医者さん	痛くなる前に治す社会インフラ～大学発ベンチャーによる次世代メンテナンス～
	People	PsySafe ABMを用いてチームのパフォーマンスを最適化する意思決定支援サービス
	記憶工房	スマホ世代に向けた、3Dプレビューによる"唯一無二"ファッション制作体験
	WA	WASUREZU RFIDとスマホアプリを活用した忘れ物防止サービス
	STSS	ToriCa旅を学びに、安全をデフォルトに
ジュニアイノベーター賞	Wrecker	超腕（スーパーアーム）～パワードスーツの普及で救助活動を迅速に～
	古とのは	助動詞バトルがお好きなんですよ
	スマートカート	スマートカート～買い物に新たな選択肢とストレスフリーな買い物～
	ピリチャ（PiriChat）	ピリチャ（PiriChat）～「ピリオド＋チャット」期限付きのチャット～
	熊人	孤独死ゼロ社会へ：低コストIoT見守りシステム
	STSS	ToriCa旅を学びに、安全をデフォルトに
	Wrecker	超腕（スーパーアーム）～パワードスーツの普及で救助活動を迅速に～

芝浦工業大学

**駅伝部が第102回箱根駅伝予選会で過去最高の18位を記録！
本選での「関東学生連合チーム」に選手選出が決定しました！！**

10月18日に行われた第102回東京箱根間往復大学駅伝競走(箱根駅伝)予選会で、駅伝部が18位(全42チーム)に入りました。陸上自衛隊立川駐屯地をスタートし、立川市街地から国営昭和記念公園を走るレースを、駅伝部は10時間49分07秒(出走上位10人の合計)でゴールし、第99回(2022年)の20位を超えて、過去最高の順位となりました。

今年は新監督に徳本一善氏、コーチには山川氏・岡田氏を迎え、4月の就任当初から練習メニューはもちろん日常生活から見直し、チーム改革に努めてチーム力を向上させてきました。予選会が行われた国営昭和記念公園では、「芝浦工業大学」ののぼりがとりわけ目立ち、総勢650人を超える大応援団が選手の走りを後押ししました。徳本監督はじめ選手・スタッフにも2027年(創立100周年)までの箱根駅伝本選出場に向けて確かな手応えを感じて充実した表情が覗えました。

総合順位18位という結果を受けて、第102回東京箱根間往復大学駅伝競走(箱根駅伝)での関東学生連合チームへの選手の選出が決定しました。



2025年度からの
新体制



女子高校生対象サマー・インターンシップ2025を開催

7月31日から8月7日まで、女子高校生を対象としたサマー・インターンシップを開催しました。本インターンシップは、研究室での研究体験を通して高度な研究や大学生と関わることで、研究意欲の高い女子生徒の将来のビジョン形成に役立てることを目的とした「高大連携プログラム」です。

2022年に始まり、4回目の開催となる今回は、8校の女子高校から過去最多の高校1年生〜3年生計94人の女子生徒が参加。参加者たちは、機械系・物質・化学系、電気電子情報系、建設系の4つの学問系統、31の研究室に分かれ、教員やTAの学生

たちのもと、「芝浦工大生」として研究体験を行いました。機能材料工学研究室(電気電子情報系)で金属の結晶組織を観察する実験を行った参加者は「実験は準備時間が長く大変でしたが、その自分分が立てた仮説とおりの結果になった時はうれしかったです」と楽しさを口にしました。

最終日、参加者たちはインターンシップで学んだ内容や参加した感想をグループごとに発表。クロージングセレモニーでは、山田学長より参加した各校の代表者に修了証が授与されました。山田学長は、理学と工学の違いや、普段工学に触れる機会の少な

さに言及しながら「このインターンシップをきっかけに、工学に興味を持っていたら大変うれしく思います。暑い中、お疲れ様でした」と参加者を労いました。

各校の代表挨拶では、「実験のプロセスを間近で体験することができました」、「高校での学びが、研究につながっていることを再認識できました」などの感想があり、非常に有意義な時間となった様子が感じられました。



芝浦工業大学附属中学高等学校

グラウンドの人工芝が新しくなりました！ オープニングセレモニーを開催

9月1日、新校舎移転9年目を迎えて消耗した人工芝の全面張替えが完了し、新しくなった人工芝グラウンドのオープニングセレモニーを開催しました。セレモニーには、総務部長や澤田施設担当理事をはじめとした学校法人理事や附属高の野球部・サッカー部の生徒が参加。始球式、蹴り始めを行い、新しい人工芝の感触を確かめました。



今回導入された人工芝は、積水樹脂株式会社の「PO+G+」。注目は充填材のチップとして採用した「EPDMゴム（ミントグリーン）」で、従来の安価な黒ゴムチップと比較して温度抑制効果が大きいことが期待されるほか、黒ゴムチップによる校内の汚れや衣服・運動器具などの汚れを防ぐことも採用した大きな目的です。また、人工芝の表面温度抑制、熱中症予防対策として「メシシステム」という散水システムを採用しています。

セレモニーに参加した生徒たちからは、グラウンドにデザインされた『ISHIBURA』の文字がカッコいいなど、新しくなったグラウンドに喜びの声が聞かれました。

電子技術研究部が「大阪・関西万博デジタル学園祭」に出展しました

7月19日、20日、電子技術研究部が大阪・関西万博デジタル学園祭に出展しました。

本学園祭は、全国情報教育コンテスト※において優れた成績を収めたチームが招待されるもので、第1回および第2回コンテストに出場した全国214チームの中から選抜された代表14チームの1校として参加しました。

この度の参加で、電子技術研究部がこれまでに培ってきた専門性



と技術力を全国レベルの舞台で発揮することができました。万博という国際的な場において、日頃の研究成果を発表する機会を得たことは、部員にとって貴重な学びと経験となりました。

※全国情報教育コンテスト

電子技術研究部のスペースフロップコンテストチームが、2024年度に行われた第1回全国情報教育コンテストのファイナリスト10校に出されました。結果は、Q&Aエッセイから「ソーシャルグッド優秀賞」を見事受賞し、副賞として学生応援TVへの出演が叶いました。その結果、本チームは大阪万博のメッセ会場にて展示発表する運びとなりました。

電子技術研究部のWebサイトはこちら



芝浦工業大学柏中学高等学校

高校1年生がベトナムで 国際サマーキャンプに参加しました

7月21日から27日の7日間、高校1年生8人がベトナムを訪れ、「ヘリテージ2025国際サマーキャンプ」に参加しました。今回の参加は、パートナーシップ協定を結ぶFPTハノイ校の系列校であるFPTクイニョン校からの招待を受けて実現したものです。生徒たちはFPTクイニョ

ン校の生徒と朝から夜まで英語でコミュニケーションを取りながら、7日間を共に過ごしました。

プログラムでは、ベトナム武術「ボヴィナム」の体験や伝統工芸品づくり、名所見学、地元コミュニティとの文化交流など多様な体験型アクティビティ

が用意されており、語学力の向上にとどまらず、文化理解や交流の輪を広げる機会となりました。



参加生徒からは「面白そうだなと思い、参加しました。タツノオトシゴの干物など、日本ではなかなか見られないものが多く、新鮮でした」（大山範峻さん）、「現地の市場や露店が特に印象的でした。東南アジアの文化に初めて触れ、多くの発見がありました」（林恵一さん）といった感想が寄せられました。最終日のディナーでは肩を組んで踊る場面もあったといい、文化の違いを感じるだけでなく、国を超えて共に楽しんだ様子が伺えました。

京都先端科学大学と高大連携協定を締結

京都先端科学大学と高大連携協定を締結し、7月3日に同大学京都太秦キャンパスで協定締結式を行いました。

今回の協定は、「グローバル社会で活躍できる人材の育成」を共通の教育目標とする両校の理念が合致したことから実現。今後は、学問やスポーツ、文化など幅広い分野において相互に交流・連携を進め、生徒に多様な学びの機会を提供していく予定です。中根正義校長は同大学の『キャンパスストーリープログラム』（企業と連携する課題解決型プログラム）や京都という国際文化都市にある立地に着目し、「本校の創立の理念である『創造性の開発と個性の発揮』を促進する取り組みになることが期待されます」と語っています。

現在、芝浦工業大学との高大連携と並行して、芝浦工業大学には



ない特色を持つ大学との連携も進めており、京都先端科学大学のほか、千葉大学、金沢工業大学、叡啓大学、三条市立大学、東邦大学看護学部、新潟医療福祉大学、新潟食糧農業大学と連携協定を締結しています。主体性が求められる大学での学びに触れる機会を増やして、生徒の知的好奇心を育むことで、積極的に人生を切り拓いていくことのできる人材の育成を推進していきます。